case 2

「部活動」「クラブ活動」として取り組む防災教育

東京都荒川区

区立中学校(10校)　「防災部」
尾久西小学校　「防災クラブ」

Date

荒川区
第一中学校、第三中学校、
第四中学校、第五中学校、
第七中学校、第九中学校、
尾久八幡中学校、南千住第二中学校、
原中学校、諏訪台中学校

尾久西小学校

事例2

「部活動」「クラブ活動」を中心に地域社会と共に進める防災教育

地域の防災を担う消防団の高齢化は、どの地域でも共通した悩みになっている。近年、注目されているのは地域にいる中学生だ。助けられる人から助ける人へ、をキーワードに、防災教育の取り組みが模索されている。すべての区立中学校に「防災部」を創設した荒川区を取材した。

荒川区の切実な事情 区民の願いは「防災」

東京都荒川区は、2015年度から10校ある区立中学校すべてに「防災部」を創設した。これには、区が抱える切実な事情がある。

荒川区には、東京都の地震危険度調査で、総合危険度が最も高い「ランク5」と指摘された地域がある。区内の半分以上が木造住宅密集地域であるため火災の危険度が高く、また、建物倒壊危険度も決して低くない。

そのような状況のなか、区の住民世論調査による「今後、区に力を入れてほしいと思うもの」のトップは3年連続で「地震などの防災対策」となった。一般に優先度が高い政策として望まれる福祉や子育て支援よりも、防災対策を望む声が最も多いのだ。

そうした地域事情や東日本大震災をきかけに、2012年、区立南千住第二中学校で、「レスキュー部」が創設された。これをモデルとして、15年に区内のすべての区立中学校で始まったのが「防災部」だ。部活動として設置されており、サッカー部や吹奏楽部など、他の部活動との兼部を認めていることが特徴だ。初年度は各校で30名程度、区内全校で300名以上の生徒が防災部に入部した。

防災部の活動は多岐にわたる。防災知識を高めるために「ジュニア防災検定」（主催：一般財団法人防災教育推進協会）を受験。学校の、地域の防災リーダーとしての自覚と自信を育んでいる。

知識や技術だけでなく、被災地訪問などの交流も実施している。友好交流都市である岩手県釜石市の、東日本大震災で津波被害を受けた中学校を訪問し、交流やディスカッションをするなどの活動を通して、「防災のために、自分は何ができるか」という視点を持つようになった。

地域との連携強化に向けた取り組みにも積極的だ。住民に参加してもらい、学校を避難所として開設するための訓練を実施したり、地域の高齢者宅を定期的に訪問したりする学校もある。

防災部のこれらの活動は、区内の消防署が全面的にバックアップ。災害時に住民が活用できる消火ポンプやAEDの操作訓練をはじめ、リヤカーに防災資器材を載せて町内の路地を回り、出前の防災訓練をすることもある。「一緒にやりませんか」と、中学生が区民に声をかけながら実施している。

被災地訪問時に「奇跡の一本松」を見学する。

防災部は出入り自由 生徒の自主性を尊重

15年当時、荒川区教育委員会で防災部の創設に関わった末永寿宣さん（現・荒川区立尾久西小学校長）は、「進路指導や部活動に追われて教員が多忙と言われる中学校でこの取り組みが実現したのは、教育委員会と中学校長会が一体となって取り組んだからです」と振り返る。

「今では、子どもたちが生き生きとして、やる気に満ちあふれています。消火訓練などはダイナミックですし、活動を通して地域の人に誉められます。区長からも、荒川区のためにがんばって、と声をかけられ、期待されています。教科学習などでは思うように成果を上げられずに悩んでいる生徒も、防災部の活動には意欲的に取り組んでいます」

防災部は登録制で、毎日の参加が義務付けられているわけではない。

「兼部もOKですし、出入りは自由です。たとえば、荒川区全体の避難訓練があるという時も、部員にアナウンスして、参加できる生徒が参加する。この日は塾があるから出られませんとか、週末はサッカーの試合です、という生徒もいます。そういうふうに自由に、生徒たちが選択できるようにして、活動を根付かせています」

防災部に参加していた生徒が中学校を卒業した後でも活動に携われるように、OB会を立ち上げ、区の防災関連行事への参加などをメールで促すシステムもスタートさせた。

荒川区は消防団の活動が盛んだが、後継者不足の問題に直面している。防災活動に取り組んだ経験のある生徒が、将来的には地域の防災リーダーや消防団員となることで、この活動を未来につないでいきたいという思いがある。

「防災部の活動を通じて、地域社会に貢献しようとする生徒が増えることを願っています。他者を思いやる気持ちを育み、いじめの芽を摘むことにもつながる活動だと確信しています」

様々な「防災部」活動。1保育園と連携した合同避難訓練 2D級ポンプの操作訓練 3永久水利施設を活用した遠距離送水訓練 4被災地訪問活動報告会での発表 5被災地訪問の交流校でディスカッション

消防団や地域の方と連携して夜回り活動をする中学生たち。

小学生にも防災部を経験を積み重ねたい

末永さんは16年から、教育委員会を離れ、校長として尾久西小学校に赴任した。すぐに取り掛かったのは、「ジュニア防災クラブ」を立ち上げることだ。小学校の教育課程に位置付けられた月1回の「クラブ活動」の時間を利用している。「防災ジュニア検定」や、AEDなどの使い方の講習、地域での防災活動など、中学校の「防災部」での活動を小学生にも伝えている。

尾久西小学校は17年度、内閣府主催の防災教育チャレンジプランの実践団体に採択された。防災教育に取り組む兵庫県神戸市のNPO法人プラス・アーツと協力し、活動に参加した児童に、修了証として「防災バッジ」を配るなどの活動も予定しているそうだ。様々な目的や動機からでも参加を促そうと、バッジは「思わず集めたくなるようなデザイン」にしているという。

「バッジ目当てでもいいんです。結果的に訓練に参加することが重要ですから。AEDでも消火栓でも、いざという時、一度でも触ったことがある人、経験したことがある人が頼りになります。できるだけ早いうち、小学生のうちに経験させたい」と末永さんは言う。

「ジュニア防災クラブ」の活動とは別に、17年度、尾久西小学校では、日本赤十字社が作成した教材を使用し、総合的な学習の時間に防災教育に取り組む。地域で予想される地震や火災などの災害だけでなく、災害の総合的な基礎知識を身につけるのが目標だ。

「荒川区では想定されていなくても、子どもたちは、将来旅行をしたり、引っ越しをしたりして、大雪の降る地域や、火山のある地域を訪れたり、そこに住むことになるかもしれません。災害時に適切に対応するための基礎を小学校で学ぶことには大きな意味があるはずですから、教育課程に位置付けたいと考えていました。まずは1コマでも防災学習をして、少しずつでも子どもたちの防災意識を高めていければよいと考えています。これから、毎年コツコツと続けて、根付かせていきたいです」

尾久西小学校「ジュニア防災クラブ」の活動。防災資材・機材を積んだリヤカーを引いて町内を回る（上）。尾久消防署員にAEDの操作訓練を受ける（下）。

「防災部」活動のポイント

- 参加自由、兼部OKで生徒の自由度を高く
- 「技量」「意欲」「知識」向上のための活動をバランス良く
- 消防団や地域住民と積極的に連携し協力体制を築く

AED操作認定講習会で指導を受けた尾久消防署員と記念撮影する子どもたち。